

菊屋家は、かつては侍の身分を持ち、南北朝時代、摂津（今の大阪、兵庫県）の貴族や神主にその血筋を遡ることができる。16世紀の前半菊屋家はもとは、山口の城下町から本州西部のいくつかの地域を支配していた大内氏の家臣であった。しかし、1550年代に毛利氏とその一族によって、大内氏は滅ぼされ、毛利氏はその地域の最大の権力者となった。大内氏を支持していた菊屋家は、ここに武士の身分を捨て、商人になった。

中世日本で社会的身分階級が一番下の商人にもかかわらず、菊屋家は長州藩の最上位の一族だった。しかし、毛利氏は1600年に関ヶ原の戦いで、全国統治の権力闘争の敗北に陥った。菊屋家は毛利氏の最大の協力者となり、毛利輝元が関ヶ原の戦いの敗北から路銀不足で帰国できなかったことを聞き、彼らの藩主が帰国するために直ちに必要な資金を調達した。これによって、非武士として最強の協力者の地位を確立したのである。

敗れた毛利氏は、広島から、萩に本拠を移封させられた。菊屋家は毛利氏に従い、それを支援し、萩を政治経済力の新しい中心として発展させることを決意した。その結果、400年以上にわたり今に至るまで所有する広大な土地に大規模な居住地が与えられた。

菊屋家は商人、武士、職人が住む町の開発に力を注ぎ、萩の発展に大きく貢献した。まもなく、萩は日本で10番目に大きな町になり、人口も3万人を擁した。下級武士や中級武士の多くは菊屋家がある北部の地域に菊屋家が建てた家に居住した。町の阿古ヶ浜海岸でさえ、菊ヶ浜と呼ぶようになった。

菊屋家はその奉仕によって、御用達の地位を獲得し、毛利家の公式商人となった。その後、町の維持管理の責任を負う大年寄格に任ぜられた。菊屋家の邸宅へ、毛利氏藩主と家臣が頻りに遊びや商用に訪れていた。その結果、菊屋家は莫大な財産だけでなく、新しい町の最も重要な一族としての名声を得たのである。幕府の役人が萩を訪れると、彼らを満足させるために、菊屋家邸宅に宿泊させることになった。